Japanese Association for Religious Studies

元の強調する「只管打坐」を「正伝の仏法」とし、それを人々に広めようということとなった。その活動は、講演活動、坐禅会、インターネットというおおよそ三つの形で展開されている。勉強の内容はこれまで主として中国語に翻訳された道元の『正法眼蔵』を読むことだが、「坐禅箴」巻、「自受用三昧」巻、「普勧坐禅儀」、「学道用心集」などの他、瑩山禅師の『伝光録』が日常的に読まれているようである。構成員は在家者で、仕事の合間に活動に参加している人が多い。メンバーの殆どは台湾本島出身者であるが、マレーシアやシンガポールなど東南アジアの華僑も含まれている。全体の人数は不明だが、活動の規模からすれば、恐らく百人前後と思われる。洪氏本人が在家でありながら、自分は日本曹洞宗の法脈を受け継いだ台湾の第一人者との認識を持つ一方、弟子たちより「老師」「禅師」などと呼ばれ、宗教家としてのイメージも多分に持っている。準宗教の性格を持っていることが窺える。

思想レベルからの道元の発見とは、具体的に傅偉勲氏の『道元』を指す。本書は実は中国語圏における最初の本格的な道元研究である。本書における傅氏の問題関心は、道元の思想そのものにある。本書の核心部分となる第四章「道元禅学の現代的理解」で取り上げられているテーマは、「修証一等」や「有時」の時間論、出家重視の思想、因果の問題、禅戒一致の思想などであり、氏はそれらをインド以来の仏教思想の流れに位置づけながら、氏自身が構想する「創造的解釈学」／creative hermeneutics という立場に立って、論を展開している。氏は道元の「誤読」にも特別な関心を示し、それを「創造的な誤読」「意図的な誤読」などとし、自分自身の構想する「創造的解釈学」とも近いものと強調する。第五章「道元禅学の現代的意義」では具体的に「道元と京都哲学派」「道元と批判仏教」「道元とハイデガー」「道元とクリシラムルティ」が論じられている。中国大陸における道元研究の本格的な成果は、現在のところ、私が企画した『中国禅学』第四巻の特集号「道元と中国禅」という程度のもののようである。まだ端緒についたばかりではあるが、重要な一歩だと思っている。

パネルの主旨とまとめ

何　燕生

そもそも近現代における禅の受容はある意味では思想としての発見だったといえる。中国の胡適による一連の禅研究はそのような方向であったし、西田幾多郎などいわゆる京都学派の哲学者たちの諸言説や禅者・鈴木大拙の取り組みも例外ではなかったと思われる。そうした中、和辻哲郎の『沙門道元』や田辺元の『正法眼蔵の哲学私観』からでも明らかなように、道元の思想が極めて大きな存在だったが、これまでそれを学問的に検討することが少なかった。本パネルは、そのような見地に立ち、また今大会の共通テーマである「思想としての宗教」に沿いつつ、思想としての道元禅を探ってみようというものである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ラルフ・ミュラーの発表は和辻哲郎に焦点を当てたものだが、和辻は近代における道元の発見者とも言える人物であり、和辻の出発点は道元を宗門から解放することにあり、それは禅宗一般を批判することによって、道元を禅宗のいわゆる「不立文字」から引き離そうという点にあったという。この発表では、不立文字の「文字性」に着目するのではなく、道元思想の原理的な考え方は言語を肯定的に捉える点にあるとの観点に立ち、『正法眼蔵』には言語の適切な概念も内包しているとの見解が呈された。そして、その際、キー概念となるのが「道得」であるという。和辻哲郎によるそうした道元思想の言語哲学的発見を考察することが本発表の狙いであった。

ゲレオン・コプフの発表は京都哲学派における道元の「無仏性」の受容についてであるが、氏によれば、道元は『正法眼蔵』で「仏性」という概念を発展させ、大涅槃経に反して、「仏性」を「有仏性」「無仏性」「空仏性」そして「無常仏性」と定義したが、これにより、一方では脱構築を包含し、他方では内在性から離れた超越性を拒否するという独自の仏性説がうち立てられることになったという。そして、八〇〇年後、そうした内在的に現れた超越性として西田哲学における「絶対即相対」を基本概念としたヒューマニズムを導入したのは、務台理作であるとする。この発表では、とくにその間の系譜が考察され、道元の思想と現代哲学との接点が模索された。

何燕生の発表はこれまで名前さえあまり知られていなかった近年の中国語圏における道元の受容についての調査研究である。それによると、台湾を中心とする中国語圏で道元の書物を読んだり、道元の強調するところの「只管打坐」を標榜し、それを実践の中に取り組んだりするような試みが一部のグループによって行われている一方、台湾および大陸の学界で中国語による道元研究関連の書物や論文が次第に見られるようになってきたという。発表者は、前者を実践レベルから道元の坐禅観を取り入れようとしているのに対して、後者の場合は思想レベルから道元の禅思想を発見しようという特徴を持っているとの分析結果が示された。今後の動向にさらに注目していく必要があるとも強調された。

石井修道氏によるコメントには、和辻哲郎の道元理解は道元の初期の著作を中心とした点に問題が残っており、また、道元と中国禅との関係の解明が今後も重要な課題となっていくとの指摘があった。そして、フロアからは、発表者三人にそれぞれ質問が寄せられた。例えばラルフ氏への質問に、「哲学には、根源的には反省と体験（実践）」の両者が必要だが、この点についてどう考えるか」、ゲレオン氏への質問に「務台理作における『一即多』の哲学は果たして世界平和に応用しうるか、多（個）としての国家だけではなく、種としての国民も、田辺の種の論理から理解される必要がないか」、何への質問に「中国の伝統的な禅と道元禅との関係はどうか」などがあった。発表者はそれぞれの立場から応答した。

いずれにせよ、国際的な取り組みによる道元研究は日本の学界では今回が初めての試みであり、道元研究の国際化を図るための重要な第一歩となったと考えている。

NII-Electronic Library Service